
ナミダ

shuugo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナミダ

【ノート】

N0390F

【作者名】

shungo

【あらすじ】

解毒剤が完成それを飲んだ二人だったが元に戻れなかったさらにその解毒剤の副作用が起こってしまった。そして……

(前書き)

「哀？」

「いやちょっと違うかな？」

私と工藤君は数ヶ月前解毒剤を飲んだ
でも

元に戻ることはできなかった

工藤新一と宮野志保の体は江戸川コナンと灰原哀になるのに抵抗し
なかつたのに

江戸川コナンと灰原哀の体は元の体に戻るのを拒んだ

そしてその体は

解毒剤の副作用を取り込んでしまった

そして私たちの体を副作用は蝕んでいった…

ある日の昼

工藤君は私を呼び出した

指定された場所に行く与其処には明らかに変わり果てた工藤君の姿

「なあ灰原…お前はこの姿になって幸せだったか？」

「……………」

突然こんなことを聞いてきたって事はおそらく

死期を…悟ったのだろう…

「ええ…幸せだったわ…あなたにも逢えたし」

「…そっか」

工藤君は寝っ転がった。

「俺も幸せだったぜ！この姿になれ…て

唯一心残りなのは…お…前…に…好き…と…言え…なか…った…
こと…だ」

そっさい終えると

工藤君は血を吐き出して目を静かにつぶった。

「工藤君！」

胸に手を当てると完全に停止していて

その体はとてつもなく冷たかった。

クドウくんハシンダンダ

いつかはこんな日がくると分かっていたけどやっぱり辛い
そして私は博士に電話をする。

『もしもし博士？私だけど急いで ×ホテルに来て…』

「うわああああん！！！！」
「ナンクーン！！！！」

そして工藤君の死は確認され今は葬式が行われている

毛利さん一家や博士、鈴木さん、服部君、工藤くんの両親、少年探偵団のみんななど

いろんな人たちがやって来てくれた。

皆すすり泣いている

でも私の目からは涙がこぼれない

明らかに違うわね

…私だけ

「ほら…哀君の番じゃよ」

「…私はいいわ」

私の番になり博士が言ったのに対し私はこう答えた。
私自身でも

何故言っただかはわからない
でも、私の体がそういうふうにしたのだからそれがベストなのだろう。

しかし

私の腕を誰かが掴んだ

その手は震えてる

「どうして？哀ちゃん」

「…吉田さん」

涙を目いっぱい溜めた彼女が私に言う

「ずっと一緒にいたんだよ？友だちなんだよ？なのに…酷いよ」

「そっだぜ灰原」

「そっですよ」

ああ

なんて私達は幸せなんだろうか
こんな素晴らしい親友を持って

「…分かったわ」

私は彼らに頷きながらさういふと彼の元に向かった。

「まずは…お疲れ様…今まで良く頑張ったわ
次に…良かったわね…こんなに多くの人が貴方の死を悲しんでく
れてるわ…」

色んな人に愛されて本当に幸せだったわね」

そう言つて彼の胸板をなでる

「天国に言つた貴方は元の姿に戻れたかしら？

…ならこの眼鏡は天国に送る必要はないでしょ？」

コナンに添えられた眼鏡を取つた
その行動に一同は啞然とする。

「代わりに此れを置くわ」

そうポケットからとつたのは一つの指輪

「この指輪『S T O S』この意味貴方にはわかるわよね？

…いや、私の本名を知らないから無理ね…私の本名は宮野志保
つまり此れは『志保から新一へ』ってこと」

眼鏡があつた場所にそれを置く。

「最後に…ごめんね？助けられなくて…でも一人にはしないから…」

あと少し待っててね？工藤君」

私はゆっくり彼の遺体から離れた

「何を言ってるの？哀ちゃん」

私が戻ると皆が寄ってきてその中を代表して吉田さんが声を掛けた

「どういうこと？」

「なんなん？新一って」

「それに工藤君って」

「何で眼鏡取ったの？」

色々な質問されるが私は黙秘を続けた。
すると

中から1人の男性が現れた

「あなた…どういうことか説明せえや」

服部君だ

彼は私の胸倉を掴んだ

「まさかやと思うけど…あなた分かってたんか？あいつが死ぬって」

「ちょ、平次何しとんねん!？」

「和葉は黙っとけ!どうなんや!？」

「…分からなかった…と言うのは間違ってるわね」

「「「「「!!!!!!!!!」」」」」

私の答えに皆目を丸くする。

「この日が訪れることは…数ヶ月前には決まってたわ

そして…今月が限界だったことも…ただ…その日がこの間だった
…それだけのことよ」

「何で…何であんたは平気何や!？アイツが…工藤が死んだんやぞ
!？」

「泣いて喜ぶの?」

「なんやと!？」

「あの人は私が泣いたら喜ぶの?」

「!!!!!!」

「喜ばないでしょ?それにね…あの人に心配掛けたくないの」

そうだったんだ

私が今まで泣いていかなかったのは工藤君に心配掛けたくないからか
副作用で激痛がしたときも彼の前では無理してた

「守ってやるとか…運命から逃げるなって

彼は私にいつも気を遣ってくれてた…だから…だから…ね」

うつむき加減だった私が顔を上げた。

「最後だけは心配掛けなくなかったの」

次の刹那

我慢していた涙が出ていた。

そして、私を掴んでいた服部君の手が緩む。

「すまん…何にも知らへんかったのに」

「いいの…大丈夫…だから」

「なあ…最後にもう一つええか？」

「…ええ」

「もしかして…あんたも…？」

「さすがね…あの人ほどではないけど凄いわ…そのことでもお願いがあるの」

私は服部君の耳元であることを言った。

「……………え？」

工藤の葬式が終わった

いろいろあつたけど何とか丸まった
でも

あの姉ちゃんが言ったことは本当か？

家に帰った俺はずっと考え込んだ

『私たちは同じ薬の副作用が起こってる…つまり私も長くない

彼が死を察したように私にも今そんな予感がするの

おそらく私は…明日にでも…死ぬ』

『ね、姉ちゃん』

『だからね…私の遺体は彼の側において欲しいの』

『……………』

『これが最初で最後の私のお願いだから』

『…分かった…任せときい！』

俺は姉ちゃんの手を承諾した。

それは彼女の決意を察したからだろう。

明日が怖い

明日

また一人俺の周りの人がいなくなるのだから

翌日の朝

俺の元に一つの電話が来た

姉ちゃんが死んだって

例の指輪をつけて

工藤の眼鏡をしっかり握り締め
穏やかな顔で死んでいたらしい

「ご冥福を…祈っとるで」

俺は彼らに心配掛けまいと涙を抑えようと上を向きながら呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0390f/>

ナミダ

2010年10月28日05時52分発行